台湾共産党覚書

森　山　昭　郎

本稿は，台湾共産党に関する覚書である。

台湾共産党は，1928年4月，上海において「日本共産党台湾民族支部」として創設された。しかしながら，その活動経緯，組織の態様などについての記録は，ほとんど残されていない。このため，その実態は知られることなく，また，今日まで省みられる所少なかった。それゆえに，一部にはその存在を否定する見解すらあったのである。[1]

ところで，筆者は,「中国共産党の台湾観の変遷」を研究する過程で，偶々，台湾共産党と中国共産党の関係について研究する機会をえた。その一端については，中国共産党側から見る台湾問題という視角から言及したことがある。[2]

本稿では，その後知りえた事実をも含め，台湾共産党と，中国共産党および日本共産党との関係，さらにはコミンテルンの指導とのかかわりなどの問題点を整理することとしたい。台湾共産党史研究は，現在その端緒についたばかりであり，また資料的制約もなお大きいと言わざるをえない。

しかし，最近，研究書として許世楷『日本統治下の台湾――抵抗と弾圧』が，また，資料集として山辺健太郎編『現代史資料――台湾』(全2巻)等が公表され，ようやく台湾共産党史に関する諸問題がどの点にあるか明らかにされつつある。そこで，これらの研究および資料に依拠しつつ党史のそれぞれの時期の重要な側面を中心に整理してみたい。本格的な研究に幾分か資する所あれば幸いである。

注

(1) 『アジア経済旬報』1970年8月中旬号所載の蔡友民論文を見よ。蔡氏の所論は林景明氏の著作に向けられている。これについては，林景明『台湾処分と日本人』

(東京，1973年)参照。

(2) See, Moriyama, Akio, "A Study on the Chinese Communists' Attitude toward Formosa--from 'Independence of Formosa' to 'Liberation of Formosa'", *The Journal of Social Science* (ICU) No. 12, May 1974; Moriyama, Akio, *The Issue of Formosa and the Chinese Communist Party*, (SSRI/ICU) August 1974

1．党の創立

(1). 創立の背景

台湾共産党創立の背景は，第1に日本による植民地統治の影響で台湾の民族資本が成長したことである。この結果，労働者数が急増し，また，資本主義の発展が「日本資本主義の急速なる躍進に基づいて発展したものである」ため，残存する非資本主義の経済要素との間に「解決し能はざる所の重要なる矛盾が介在する[1]」こととなった。一面において，これが革命運動の要因となったわけである。第2に，同じ日本の植民地であった朝鮮での3・1独立運動（1919年）である。これ以後，台湾においては自治要求運動が急速に高まった。そして第3に，中国における革命運動の進展，特に5・30事件と国民革命の進行がある。これにより上海で，あるいは東京で多くの台湾青年が革命思想に眼を開かれたと言えよう[2]。

このような客観条件下に，台湾共産党を成立せしめたのは，コミンテルンである。直接の指導と援助はその支部たる日本共産党および中国共産党によってなされた。

(2). 創立準備会

1927年11月頃，台湾人中国共産党員，林木順，謝雪紅の両名は，コミンテルンの指令にもとづき，台湾共産党を創設すべく，留学先のモスクワから上海へ帰還した[3]。コミンテルンの，日本の諸問題に関するテーゼ，いわゆる27年テーゼが「植民地の完全な独立」を規定し，朝鮮および台湾における共産主義運動への支援を，日本共産党の重要任務の1つとし

たためであるという[4]。そこで，同年12月，謝雪紅と林木順は相次いで東京へと向い，日本共産党からの指示を受けることとなった。謝，林が日本共産党と連絡するに際しては，当時の上海駐在日共連絡員，鍋山貞親を通じてこれを行なったと言われる[5]。

翌28年1月，謝，林は日本共産党中央が作成した組織テーゼ・政治テーゼ草案を受けた[6]。2人は，翌2月，東京台湾青年会社会科学研究部委員，陳来旺をともない，上海にもどった。このとき受けた組織テーゼには，当分の間台湾党を日本共産党の支部とすべきこと，また，結党に際しては中国共産党の指導と援助を受けるべきことが指示されていたという[7]。

謝，林はこの指示に基き，上海台湾学生連合会で活動していた台湾人中国共産党員翁沢生らの参画を得て，党結成準備に着手した。この準備段階では，参画者の間に台湾党を日本共産党の支部とすべきか，あるいは中国共産党の支部とすべきかをめぐって論争があったといわれる。謝，林は共にコミンテルンの指示をタテに，中国共産党に所属すべきとする翁沢生を押し切ったというのである[8]。

4月13日，結党準備の総仕上げとして，「台湾共産主義者積極分子大会」が上海で開かれることとなった。出席者は謝，林，陳，翁の他，6名の台湾人と，中国共産党の派遣した代表「彭栄」の計11人であったといわれる[9]。大会は結党大会の開催を決定し，会場の選定を「彭栄」に一任することとなった[10]。

2月に党創立の準備に着手してから，最終的な準備会の開催に至るまでに2ヶ月もの期間を要したのは，林木順，謝雪紅のリーダーシップに対して，独断，専制の非難があったからだと陳来旺は述べている[11]。前記の所属問題をはじめ，モスクワから帰還したばかりの謝，林と台湾島内や上海で活動していた翁沢生らとの間の情勢認識の差異が，このような対立，論争をもたらしたのであろうか。

(3). 創立大会

かくして4月15日，台湾共産党結党大会は上海フランス租界の一隅で開催された。林木順が仮議長として開会を宣し，次いで謝雪紅を議長として議事を進行した。[02] 席上，謝議長は次のようなあいさつを行なっている。

「台湾共産党の成立は台湾解放運動の第一声であり，無産階級の奮斗が必然生まれて来る所のものである。

本日又頗る偉大な意義と光輝を有する中国共産党の代表が，本成立大会に参加せられたのは最も光栄というべきである。[03]」

続いて中国共産党代表「彭栄」が祝辞に立った。彭は，演説の冒頭で，こう述べている。

「余の報告は非常に短いものであるが，諸君に一種の参考を供し，台湾革命をして，中国革命の経験を以って教訓と為さしむるであろう。台湾革命をして再び，機会主義の錯誤を犯させない事，是れが余の報告の最大目的である。[04]」

彭の祝辞を受けて，林木順は「重要問題に対しては我等は中国代表の指示に従い，実際運動に於て堅く努力実行」すると答辞を述べた。ついで大会は前記組織，政治テーゼにもとづく「組織大綱」「政治大綱」と，労働運動，農民運動等に関する対策の審議に入り，中国共産党代表の若干のコメントを得た上で可決した。労農運動草案のみは，更に審議の必要があるため中国共産党代表が持ち帰ることになったという。[05]

各議案の審議の後，中国共産党中央に致す書及び結党大会宣言を後日起草することを決定し，また，党役員を次のように決定した。

中央委員　林木順　林日高　荘春火　洪朝宗　蔡孝乾

中央委員候補　翁沢生　謝雪紅

書記　　林木順

なお選任された役員の内，荘春火，洪朝宗，蔡孝乾の３名は大会には出席していなかったと考えられている。日本共産党からの代表も出席していないようである。

(4). １期１中全会

結成大会から３日後の４月18日，第１回中央委員会が開催された。この会議の目的は，党中央の役員人事を決定するにあった。中央委員として，林木順，林日高が，また，不在中央委員の代理として翁沢生と謝雪紅の計４名が出席した[16]。委員会は中央常任委員に林木順，林日高，蔡孝乾の３名を選出し，また，各中央委員の配置を次の通りとすることに決定した。

書記	林木順
組織部	林木順
農民運動部	洪朝宗
青年運動部	荘春火
宣伝運動部	蔡孝乾
婦女部	林日高
東京特別支部	陳来旺
日本共産党連絡員	謝雪紅
中国共産党連絡員	翁沢生

党結成宣言並びに「中国共産党に致す書」は更に２日後起草されることとなり，４月２０日，４人は上海での最後の会合を持つこととなった。台湾共産党結党宣言は党成立大会代表が任地に赴く際，それぞれ携行して配布することとし，同時に党の成立を以下の書簡によって，中国共産党中央に通知することとされた。また，日本共産党中央に対しては，書記林木順が報告することになった。（この点からも日共は創立前後の台湾共産党に対する援助を行なわなかったように思われる。）

「中国共産党中央に致せる書」

「中央：台湾共産党は4月15日成立を宣布した。成立大会の時中央代表の参加を得，並びに中央代表の報告せる中国革命の過去及現段階の情勢を聴く事を得殊に中央代表は中国革命の経験と植民地革命の特に注意すべき重要点に対して非常に詳細に我等に指示し，大会の全体同志をして中国革命に対し多大な教訓を接受する事を得しめた。この点大会の全体同志は頗る懇誠に中央に対して感謝と接受を表示する。〔中略〕台湾共産党の構成分子は多くは曽て中国共産党に加入し，中国共産党の指導訓練を受けたものである。故に台湾共産党の成立は頗る密接な意義（関係）を有し，台湾革命も亦中国革命と関連する所が頗る多い。然れば中国共産党が台湾党に対して極力指導と援助を與へられん事を希望する。是れは大会全体同志が中国共産党に対する最も熱烈な要求である[11]。」

注

(1) 内務省警保局保安課「台湾共産党検挙の概要」昭和3年（山辺健太郎編『台湾』2，現代史資料22）262～3ページ。

(2) 若林正丈「中国々民革命と台湾青年」，『アジア経済旬報』915～6号参照。

(3) 台湾総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌』第2編中巻，昭和14年，588ページ。

(4) 同前，およびDegras, Jane. ed., *The Communist International* 1919-1943; *Documents*, 3 vols. vol II, London 1960 参照。

(5) 前掲「警察沿革誌」588～9ページ。ただし，日共側文書では鍋山は27年12月に帰京したとされる。

(6) この時，両人は日本共産党中央委員会に列席して指示を受けたと語ったとも言われるが，定かでない。前掲「警察沿革誌」589ページ，および日本共産党中央委員会編『渡辺政之輔著作集』，1962年，付録年譜参照。

(7) 「警察沿革誌」589ページ。

(8) 王育徳 『台湾――苦悶するその歴史』1964年，127ページ。「警察沿革誌」589ページ。ただし論争の際の対立点，対立グループについては異同がみられる。

(9) 「警察沿革誌」589～590ページ。

(10) 同前。

(11) 警視庁特別高等課内鮮高等係「日本共産党台湾民族支部東京特別支部員検挙顛末」昭和4年（山辺編前掲書所収）86ページ。

(12) 「警察沿革誌」590～1ページ。前掲「検挙の概要」付録「台湾共産党成立大会記録」245～6ページ。
(13) 同前書，246ページ。
(14) 報告の全文は，同前書，246～251ページ所収。
(15) 同前書，252～3ページ。
(16) 「警察沿革誌」657ページ。
(17) 同前書，657～661ページ。

2．成立大会の一，二の問題

かくして台湾共産党は結成されたが，党創立に関連して二，三の疑問が残されている。

〈大会列席者の問題〉

まず，成立大会への列席者の問題がある。「党成立大会記録」は出席者数を明記せず，『警察沿革誌』が党員7名，中国共産党および朝鮮共産主義者代表の列席を主張する他，諸説がある。

『警察沿革誌』は，中国共産党代表の名を「彭栄」と記し，又，朝鮮共産主義者代表として呂運了の名を挙げている[1]。台湾共産党成立大会記録には，前者の報告全文を収めるものの，その名を記さず，後者については一語の言及もない。

中国共産党代表「彭栄」とは一体誰であったのだろうか。許世楷氏はその著書で彭湃のことと考証されている[2]。しかしながら，彭湃がこの時期に上海に居たと考えることは困難であろう。海陸豊ソヴェトの指導者であった彭湃は，28年2月末にソヴェトが崩壊した後，上海に潜入したと言われる。だがその時期は明らかでなく，一説には，この頃病を得て広東省恵来地方の山中に臥していたとも言う[3]。但し，前述の「彭栄」の報告中，海陸豊ソヴェトに繰り返し言及していることは事実である。結局，中国共産党が台湾共産党成立大会に派遣した代表が，誰であったかは今のところ不明であるという他ない[4]。

朝鮮共産主義者代表として記録される呂運了は上海に居り，共産主義者グループと接触があったと言われることから，その出席も不自然と

は言えない[5]。前述の彭の報告中，中国共産党が国共合作の末期に機会主義の錯誤を犯したという段に及んで，「此の点今後の朝鮮台湾の革命に取て最大の教訓である（傍点引用者）」とわざわざ朝鮮に言及していることからも，朝鮮代表の列席がうかがわれる[6]。

ところで，「日本共産党民族支部」として成立した台湾共産党の結党大会に，日本共産党の代表は出席しなかったのであろうか？中国語文献にも，中国共産党の「指導と援助」のみを記すもの[7]と，日本共産党代表の出席をも記すもの[8]とがある。許世楷氏が出席者9名とする考証の中には日共代表は含まれていない[9]。これに関連して，他ならぬ日本共産党の機関紙『赤旗』に次の様な記事が見える。

「台湾共産党は，1928年上海に於て，我党の同志渡政並びに中国共産党，朝鮮共産党代表の参加の下に台湾の同志××名に依って成立大会が行なわれ，日本共産党民族支部として結成された。[10]」

文中にいう同志渡政，つまり，当時の日本共産党書記長，渡辺政之輔は同年10月，上海経由で台湾へ入り，基隆埠頭で取調べの警官を射殺した後，自殺したとされる。この時，渡辺は台湾共産党の活動に関する任務を負っていたとする説もある[11]。しかし，前述の赤旗の記事は，台湾共産党に対する弾圧後数年を経て後，報道が解禁されてからのものだけに，渡辺政之輔の10月の渡台と台湾共産党結党大会への出席とを混同しているように思える。

〈少数民族問題〉

台湾共産党の政治大綱は，鄭成功以後中国南部から台湾に移住した漢人が増加したと指適し，「所謂台湾民族なるものは即ち是等の南方移民が渡台して結成したものである」と台湾民族を規定する[12]。そして，「民族独立運動の形勢」(政治大綱第3節）を展望した上で，「民族独立の為に戦斗せねばならず」，「台湾無産階級の解放は若し民族独立斗争と結合して戦斗するに非ざれば必ずや本階級独自の斗争を発揮することが出来ぬ」と

結んでいる[13]。これに関連して，前に引用した日本共産党中央委員会機関紙『赤旗』154号は次の様に述べている。

「〔台湾共産党は，創立〕以来，残忍無類の日本帝国主義，台湾総督府のテロルと，一部日和見主義者の動揺を蹴って台湾民衆の先頭に立って闘ひ，**日本帝国主義の打倒**／**台湾の完全なる独立**／**労働者農民の政府樹立**／を目指して活動して来た。[14]」

政治大綱が定めるごとく，また『赤旗』が描くごとく，「台湾独立」のスローガンは，台湾共産党のその後の活動と不可分と言える。しかしながら，「台湾独立」の主体の規定において，台湾共産党は当時の言葉で言う「生蕃」あるいは「高砂族」，今日「高山族」と呼ばれる少数民族を含めることをしなかった。政治大綱は先の台湾民族の規定を「台湾最初の住民は野蛮なる生蕃であった」という言葉で書出している[15]。ところが，「野蛮なる」という形容は，テーゼ草案にはなかったと言われる[16]。2年後，霧社事件が発生するや，中国共産党は中央機関紙『紅旗日報』において「無産階級の領導の下に蕃人漢人及日本労働者と連合し……始めて『台湾民族革命』の勝利を獲得しうる」のだと論じている[17]。そして，1930年12月初旬，台湾共産党に対する改革を指示した瞿秋白は，少数民族問題についても中国共産党中央としての意見を述べたとされる[18]。

「台湾に於ける同志等は事実今日迄民族運動に労働運動に余りに『生蕃』を過少評価し」ていたという指適をも受けねばならなかったのである[19]。政治テーゼ草案は，成立大会時における台湾共産党指導者の高山族観を反映していたと言えよう。

少数民族問題に関する認識が乏しいかった点は，成立大会に中国共産党代表が出席していたことから見るに，不可思議な印象を与える。何となれば，1928年夏，モスクワで開催された中国共産党第6次全国代表大会は，少数民族工作を重視し，各民族の言語を使用する専門的機関の設置を指示したと言われるからである[20]。中国共産党もまた，台湾共産党

同様，台湾における少数民族問題については十分な認識を持たなかったのであろうか。成立大会記録に見るかぎり，中国共産党代表の発言にはこの問題への言及が欠けている。

注

(1) 前掲『警察沿革誌』590ページ。

(2) 許世楷，前掲書，328ページ。許氏は，李稚甫『台湾人民革命鬥争簡史』(華南人民出版社，1955年）を典拠としている。

(3) ニム・ウェイルズ『アリランの歌――一朝鮮人革命家の生涯』(安藤次郎訳，みすず書房，1965年）143～145ページ。
彭湃の行動については，衛藤瀋吉「海陸豊ソヴェト史」『近代中国研究』第2輯，1958年（後，同氏『東アジア政治史研究』東大出版会1968年に収録），山本秀夫「彭湃と農民運動」『アジア経済』第10巻12号(1968年12月)を参照。両論文共に，ニム・ウェイルズ前掲書に拠りつつ，彭湃がこの時期に恵来地方に居たと推定している。

(4) Cf. Moriyama, *The Issue of Formosa*, op. cit. & "The Chinese Communists Attitude", op. cit.

(5) たとえば前掲『警察沿革誌』77～78ページなど。なお，呂運了については，『白凡逸史』(平凡社，〈東洋文庫〉）など参照。

(6) 前掲『検挙の概要』248ページ。

(7) たとえば，張禹編著『我們的台湾』上海，新知識出版社，1955年，85～86ページ。また劉大年等『台湾歴史概述』北京，三聯書店，1956年，72ページ。

(8) 荘嘉農『憤怒的台湾』香港，智源書局1949年，56ページなど。
荘嘉農は，日共からの出席者として渡辺政之輔の他，徳田球一の名を挙げている。その記載に従えば，出席者は10名以上になる。

(9) 許世楷，前掲書，328ページ。

(10) 『赤旗』第154号（1933年8月16日）2ページ。
(引用は，『赤旗』〈非合法時代の日本共産党中央委員会機関紙〉全4巻，別巻1，白石書店，1972年～1973年による。第4巻46ページ。)

(11) 前掲『警察沿革誌』669～670ページ。
日本共産党中央委員会出版部『渡辺政之輔著作集』(1962年）187～194ページ。

(12) 前掲『検挙の概要』261ページ。

(13) 同前書，271ページ。

(14) 『赤旗』第154号，(1933年8月16日）2ページ。

(15) 前掲『検挙の概要』261ページ。

(16) 前掲，山辺編『台湾』第2巻，解説，XXi～XXiii

(17) 『紅旗日報』第71号，1930年11月2日，社論，(同前書，602ページ所収）但し，

『紅旗日報』原文未見。同紙は1930年10月末，第64号までの発行しか確認されていない。宇野重昭「中国共産党史研究資料について」，『政治経済論叢』(成蹊大学)第14巻第4号所収，参照。

(18) 前掲『警察沿革誌』674～675ページ。
瞿秋白については，宇野重昭『中国共産党史序説』(上)(日本放送出版協会，1973年) 118～119ページを見よ。

(19) 陳元「台湾霧社に於ける暴動」『太平洋労働者』(汎太平洋労働者組合機関紙) 1930年11月，(前掲『現代史資料』第2巻，672～673ページ)。

(20) 「台湾問題の基礎研究―(1)」(日本国際問題研究所所蔵，筆者不明)138ページ。
コミンテルンのクーシネン・テーゼとの関連においても重要な問題と言えよう。

3．謝雪紅時代

〈上海読書会事件〉

台湾共産党成立からわずかに10日後，党は最初の弾圧を受けた。謝雪紅を初めとする党幹部が，創立準備に際して組織した読書会の関係者として治安当局に検挙されたのである。これを「上海読書会事件」という。この時，台湾共産党成立大会記録を初めとする諸文書が押収された。今日，我々が眼にしうる『台湾共産党検挙の概要』所収の諸文書がそれである[1]。

ところで，検挙された党幹部は，台湾共産党との関係を否定し，結局，読書会のメンバーに実刑が下されたに止まり，謝雪紅らは不起訴とされた。しかしながら，《上海読書会事件》が，台湾共産党に与えた影響は大きなものであった。中央常務委員のうち，林木順，翁沢生は地下に潜行し，蔡孝乾は台湾島内にあったにもかかわらず，追求を恐れて中国大陸へと逃亡したのである。蔡孝乾は，最近この間の事情を次の様に回想している。

「1928年8月，上海で『台共事件』が発生した。台湾島内の組織に波及することが懸念されたため，会議による決定を経た上で数名の幹部は台湾を離れることとなった。8月下旬のある晩，私と洪朝宗，潘欽信および謝玉葉とは，島北部の後龍港からひそかに乗船して台湾を脱

出，潭州へと向った。[2]

蔡孝乾は，回想の常として典拠なしにこう語っているが，その内容には必ずしも信頼できない点があろう。

第1に台湾共産党員の検挙は1928年8月ではなく，4月であり，第2に，これと関連するが当時台湾島内には党組織は確立されていない。従って第3に，党機関の会議決定によって幹部が台湾を脱出したというのは奇妙だということになる。このような蔡の回想は，自己の行動の正当化ないし合理化の意味を持ったものと考えるべきであろう。蔡の後年の回想は，1936年にエドガー・スノーに対して自らの経歴を語ったものとも食違っている。[3] スノーに対しては大陸に逃れた後，1930年前後に中国共産党の支援下に台湾共産党廈門支部を結成し，廈門で党活動を継続したとも主張している。[4] その実態の程は明らかでないが，後年彼が中国共産党と行を共にするにあたっては，彼が《上海読書会事件》に恐懼して逃亡したという点は伏せられていたであろう。

それはともかく，謝雪紅は東京へ行くべきところを台湾へ送還され，1928年6月そこで釈放された。謝はそのまま台湾に残り，混乱収拾のため日本共産党の指示をえようとした。台湾からの指示要請は，台湾共産党東京特別支部の責任者たる陳来旺にもたらされた。しかし，日本共産党との連絡は同年の3・15事件以来絶たれたままであった。

同年11月，ようやく日本共産党の指令がもたらされ，これを受けて謝雪紅の党内指導権が確立された。謝は中央委員に昇格して党の指導権を掌握し，蔡孝乾以下4名の大陸逃亡者は機会主義者として除名されることとなったのである。[5]

謝雪紅の指導権確立後，台湾共産党は農民組合，および文化協会内に活動の足場を築いた。1928年末から1930年にかけて，台湾共産党はこれらの組織に対して影響力を及ぼすと共に党員の獲得につとめている。[6]

〈松山会議〉

1929年末頃には，次第に党勢は拡大していたが，依然として，党の組織は秘密に付されたままであった。

この頃，日本共産党との連絡は全く絶えていたため，謝雪紅らは，上海駐在の中央委員候補翁沢生を通じて，中国共産党ないしコミンテルン東方局に指示を仰ごうと決したと言われる[7]。翌1930年5月，中央委員林日高は上海に到着し，翁沢生と接触した。しかし翁沢生は党改革の必要を説くのみで冷淡な態度に終始した。このため，林日高は党活動への意欲を失ない，七月帰台するや荘春火と共に脱党したのである。こうして，党中央にはわずかに謝雪紅1人がとどまることとなった[8]。

1930年10月，謝雪紅は党勢拡大の為拡大中央委員会を開催することとし，同月27日より29日まで，台北州松山で謝の他6名の党員が参加した。これが「松山会議」と呼ばれる会議である。会議は党の正式大会召集に先立ち，新方針を討議するために召集されたものという[9]。この会議の開催によって，一般党員の間に存在した党幹部への不信は一掃され，また活動方針の明確化に伴い，活動そのものも活発化したのである。

〈党改革をめぐって〉

1930年12月，中国共産党中央委員瞿秋白は，上海において翁沢生，潘欽信を訪れ次の様に党の改革を求めたと言う。

「自分は中国党中央を代表して来た者で，台湾党の問題に付台湾の同志と話をしようと思うのである。

「中国党中央は友誼的立場より台湾の全党員諸君に向い，台湾党の改革を提議するものである。之は中国党中央の意見であるが，東方局も亦此の提議に同意している。」[10]

こうして中国共産党およびコミンテルン東方局は，台湾共産党の改革を指示して来た。しかし，その際参考とされた意見は，謝雪紅らの報告ではなく，上海にあった翁沢生や，読書会事件後逃亡して除名された潘

欽信らのそれであった。ここに，翁らのグループと謝雪紅との党改革をめぐる斗争が始まった。

翁沢生，潘欽信らからもたらされた党の機会主義および謝雪紅のセクト主義批判は，改革同盟の成立（1931年1月）という形で党内に受け入れられた。31年5月末，臨時党大会が開催され，謝雪紅らは除名されることとなった。臨時党大会とその後の中央委員会は，王萬得を書記長に任じ，潘欽信を中央常任委員に選任したのである。大会はまた，急進的な政治テーゼを採択し，その後台湾共産党は一段と激しい活動を行なうこととなった。[11]

しかし，急進化した活動のゆえに，台湾共産党は治安当局にその全貌を知らしめることともなった。臨時党大会開催後の31年6月以後，党関係者は相ついで検挙され，党は崩壊の一途をたどることとなったのである。

注

(1). 前掲『検挙の概要』には，成立大会宣言などを含む大会記録と，組織大綱議決案，政治大綱草案その他の諸文書を収録する。台湾共産党創立前後の事情を知るに必要な一書である。

(2). 蔡孝乾『江西蘇区・江軍西竄回憶』(台北，1970年) 3ページ。

(3). エドガー・スノー『中共雑記』(東京，1964年) 参照

(4). 同前書。

(5). 前掲『警察沿革誌』668～669ページ。

(6). 謝雪紅のリーダーシップ下の台湾共産党の活動については，許世楷，前掲書，王育徳，前掲書，などが積極的にこれを祖述するのに対し，山辺健太郎氏は，「これ以後（上海読書会事件……引用者）たいした活動はしていない」とする。しかし，山辺氏の評価は，当時の台湾における民族運動関係者の認識に照らしても，消極的にすぎるように思える。たとえば謝春木『臺灣人の要求』（台北，1931年。復刻版，東京，1974年）

(7). 前掲『警察沿革誌』671ページ。同書では，29年11月，中央委員会（謝雪紅，林日高，荘春火）の機関決定とする。

(8). 同前書，671～672ページ。

(9). 同前。

(10). 同前書，674～675ページ。

(11). 同前書，675～680，689～692，712～715ページ。潘欽信の復帰は明らかに中国共産党が潘を支持したことによるが，中国共産党が，何故潘を支持したかは不明である。

むすびにかえて

台湾共産党はわずかに4年程しか存在しえなかった。その間，謝雪紅が中心となって活動したことは疑いない。謝雪紅は，終始，正式の上部団体たる日本共産党の指示を受けるべく努力していた。しかしながら，日本共産党自身がしばしば活動不能な状態に陥ったために，その努力は水泡に帰したのである。

それにつけても，不可思議なのはコミンテルン東方局と中国共産党の指令が，謝雪紅らを排斥するにいたったことである。コミンテルン，中国共産党共に，《上海読書会事件》以後地下に潜行した翁沢生，逃亡した潘欽信，蔡孝乾らを支持した理由は明らかでない。あるいは，瞿秋白から李立三にいたる当時の中国共産党の急進路線と関連があるのかもしれない[1]。すでに述べたように，蔡孝乾らが中国共産党と接触した際には，「会議による決定」によって脱出したとされたのではあろうが。

ところで，蔡孝乾はその回想録の中で，上海に台湾共産党の総本部があったかに記している。翁沢生らの改革同盟問題との関連が注目されよう。また，蔡は当時何人かの中国共産党員と接触があったと回想している。台湾総督府の文書によれば，瞿秋白の他，中国共産党福健省委員会常務委員羅一清，あるいは中央組織部秘書長らが台湾共産党にたいする指導と援助を行なったとされる。ただし，このような記述がどこまで信頼しうるかには疑問があろう。創立大会への中国共産党代表が誰であったかが不明であるように，疑問の点はすこぶる多いと言わざるをえない。この小論にも誤りの少なからずあろうことを恐れるばかりである。

(1974年12月)

注

(1). 東京大学の若林正丈氏は，コミンテルンの「一国一党主義」との関連でとらえようとされるが(補注)，「台湾独立」の基本方針，謝雪紅排斥等の問題との関連については疑問が残ろう。

(補注) 本稿が印刷行程に入ってから，「『台湾革命』とコミンテルン」『思想』第610号（1975年4月）として公刊された。同論文では党の「再組織」という用語でとらえられている。台湾共産党に関する最も優れた論稿の一つである。

Random Notes on the Formosan Communist Party

≪ Summary ≫

Akio Moriyama

On April 15, 1928, the Formosan Communist Party (FCP) was established under the direct influence and support of the Chinese Communist Party (CCP) and the Japanese Communist Party (JCP) as "the Formosan Nation Branch of the Japanese Communist Party". Accepting the instructions from the Communist International (CI), Formosan members of CCP, Lin Mu-chun and Hsieh Hsüeh-hung returned at the end of 1927 to Shanghai from Moscow, where they had studied, while the Thesis of 1927 determined "complete independence of the colony" and instructions of communist movements to both Korea and Formosa as an important role of JCP. Therefore, the organizational thesis of FCP, which was issued from the Central Committee of JCP, prescribed that FCP should be a branch of JCP for an adequate period. There seems, however, to have been a dispute among the Formosan Communists as to whether or not belong to JCP.

When some leaders were arrested by the security office in Shanghai, some activists in the island of Formosa deserted FCP because of fear. Hsieh Hsüeh-hung, one of the arrested persons, tried to reorganize the party center seeking the instructions from JCP. However, through the short history of FCP. JCP could not give sufficient aids to FCP while JCP had their own troubles and suppression by the security office. This was one of the major reasons why the Formosan Communists could not continue their activities so long.

On the other hand, support from CCP and CI was not thorough, either. Although Hsieh Hsüeh-hung's leadership led FCP in advance, CCP and CI indicated reformation of the party based on the information from the fugitives. Hence, the Formosan Communists had to face the party struggle that caused FCP to die.